

# 郷土博物館・文学館だより

## 第7回 渋谷現代短歌募集 優秀作品発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

7回目を迎えた平成18年度は、29名から93首が寄せられ、過去最多の応募数となりました。この中から選ばれた優秀作品5首を『しずや区ニュース』に発表し、歌を書写した色紙は、当館と渋谷区役所中央エレベータ前ホールに展示しました。

当館で行われた表彰式では、表彰者から、当館の文学講座「短歌を詠もう、短歌を知ろう」

で経験を積んだ結果が、良い作品につながったとの感想をうかがいました。

平成19年度も10月から歌の実作を中心とした同講座を開講します。より多くの方の講座参加と「第8回渋谷現代短歌募集」への応募を期待しています。



表彰された皆さん(優秀作品表彰式にて)

「優秀作品」

遠見久美運

町内の坂登りゆけば顔馴染の

「平岩弓枝」の家の灯点る

(渋谷区 浅倉サカ工さん)

春の小川偲びて跡にたたずめば

乾いた音たて小田急がゆく

(渋谷区 丹野美佐夫さん)

駐車場に新詩社跡の札立ちて

フロントガラスに月光のさす

(渋谷区 中山春美さん)

泣くまいと夜空見上げた南平台

あの日と同じ上弦の月

(渋谷区 野垣美由紀さん)

幾万の出会いと別れ見てきたる

八千公時に目を潤ませる

(板橋区 福島久男さん)

## 縄文人骨が見つかった貝塚 — “ 豊沢貝塚 ” —

豊沢貝塚は渋谷区の東南端、ちょうど都立広尾病院の南側に位置します。この遺跡は、昭和55年(1980)に最初の発掘調査が渋谷区教育委員会と國學院大學とによって行われました。その後も何度か調査が行われ、旧石器時代から古代まで、連綿とこの場所にひとが住んでいたことがわかりました。

これまで渋谷では、幡ヶ谷・千駄ヶ谷・代々木・西渋谷・東渋谷の五つの台地上に103の遺跡が見つかっています。その後、開発等によって壊されてしまい、現在では78ヶ所が残っているのみです。このうち代表的な縄文時代の遺跡は、竪穴住居を復元してある代々木八幡遺跡と、今回ご紹介する豊沢貝塚です。

豊沢貝塚では、約2万年ぐらい前からひとが住んでいたようですが、遺跡の中心となるのは縄文時代です。縄文時代でも後期・晩期、今から約4,000~2,500年前の土器や石器などの遺物がたくさん出土しています。このほか当時の縄文人が暮らした住居の跡や、食べ物を保存したと思われる貯蔵穴も見つかっています。

また貝塚ですので、海水などに生息している貝、魚や動物の骨が出土しました。縄文人は食べた後の貝殻や骨、さらには土器なども、ある場所にまとめて捨てていました。捨てられたものは塚状に堆積し、これを貝塚と呼んでいます。大きさはいろいろですが、大規模な貝塚では干貝を生産していた可能性が指摘されています。しかし豊沢貝塚の場合は、直径50~80cmの穴に食べたものを捨てた小規模なもので、地点貝塚と呼ばれています。

では、縄文人はどんな種類の貝や魚を食べていたのでしょうか。貝はたとえばアサリ、ハマグリ、ハイガイ、カキ、アカニシガイ、バイガイなどです。魚はアジ、マダイ、スズキ、サバ、フグ、サメなどの骨や歯が見つかりました。貝塚が作られた頃は、海岸線は渋谷の近くまで来ていて、たくさんの海産物をとることができたようです。食べているものを現代と比べてみても、あまり変わっていません。このほかイノシシ、シカ、サル、ヘビ、カメ、キジの骨や歯も出土しています。縄文人は、さまざまな種類のもを食べていました。

さらにここで生活していた縄文人のお墓と人骨が、第2地点を調査していた際に発見されました。渋谷では初めてのことです。人骨は2体発見され、掘り込んだ穴の中に、頭が東、足が西になるように埋葬されていました。足は折り曲げられた状態(屈葬)で、性別は男性、30~40歳ぐらいと推定されています。通常、酸性の土では骨はとけてしまいましたが、ここでは貝殻などの成分で土が中和され、残ったようです。

まだまだ、新しい発見が期待される遺跡です。



縄文人骨の出土状態

## 馬場孤蝶と明治の渋谷

英文学者・翻訳家・随筆家など、多彩な顔をもつ馬場孤蝶は、生涯に2度、渋谷にかかわりをもちました。孤蝶は明治2年(1869)、現在の高知県に生まれました。11年に上京し、共立学校(現在の開成中学校)、そして明治学院に学びます。卒業後、英語の教師として高知に戻りますが、再び上京し、26年に創刊された雑誌『文学界』の同人として活躍します。その後、文学界の同人であった平田禿木の勧めで、雑誌『明星』に作品を発表するようになります。

『明星』は与謝野鉄幹が主宰する東京新詩社によって明治33年に刊行された雑誌で、その登場は当時の文壇の注目を集めていました。この『明星』に最初に掲載された孤蝶の作品は、34年10月号の「湖畔の秋」でした。それから孤蝶は次々に作品を掲載するようになります。そしてこの頃、孤蝶は初めて渋谷道玄坂の鉄幹・晶子夫妻の家を訪れます。以後、与謝野夫妻との長い交流が始まります。

与謝野夫妻の家をしばしば訪れた当時のことは、孤蝶の没後昭和17年(1942)に刊行された『明治の東京』の中で触れられています。当時、孤蝶は小石川方面に住んでいたため、現在の中央線に乗って渋谷に向かいました。そして当時の渋谷近辺が「如何にも田舎路らしい気がして、面白かった」ので、いつも代々木で乗り換えずに、新宿まで行き、そこから道玄坂の与謝野家まで回り道をしながら歩いたそうです。

与謝野夫妻は明治37年に道玄坂から千駄ヶ

谷に転居しますが、孤蝶はここにもよく訪れており、与謝野家からの帰りはいつも深夜になるほどでした。『明星』は43年、この千駄ヶ谷において終刊を迎えますが、この『明星』刊行時代のことについて、孤蝶は「与謝野君御夫婦はよくまアあのやうな全く惨澹たる生活を忍びながら『明星』の刊行を続けられたと思ふ(中略)あの忍耐と勇氣は、今思ひ出すごとに、感嘆の念を禁じ得ない」と語っています。

孤蝶は後年、かつての道玄坂・千駄ヶ谷の与謝野家近辺を訪れてみました。しかし、当時とはすっかり変わってしまった渋谷の街並みに、昔の道を思い通りにたどることはできませんでした。何度も通った渋谷に孤蝶自身が住むようになるのは晩年に近い昭和12年(1937)のことです。そして15年、思い出の多いこの地において71歳で亡くなりました。



明治末年の道玄坂



## 収蔵資料紹介



村田和義氏撮影

### あみだいっそん 十ぞういたび 「阿弥陀一尊図像板碑」(室町時代)

区指定有形文化財(平成18年度 新指定)

高 113.1cm (下部欠損)  
幅(上) 40.4cm (下) 42.8cm  
厚(上) 3.2cm (中) 3.2cm (下) 4.2cm

阿弥陀一尊図像板碑が、平成18年度に板碑としては初の区指定有形文化財となりました。本図像板碑の材質は、関東地方における他の事例同様に秩父産の緑泥片岩でつくられています。板碑の基本的構造(形状)は、上から山形の部分を頂部とい、その下に二段の切込み(二条線)を設け、やや突出気味の額部がそれに続きます。以下、板碑の中心をなす身部、地下に差し込んで地面に立てる役割を担う基部というのが板碑の主な構成です。

本図像板碑は、身部の一部と基部を欠損しており、身部には、線刻で日月や天蓋が彫りこまれ、蓮台上に正面を向いた阿弥陀如来立像が来迎印(全てのものを極楽浄土へ導く)を結んで描かれています。蓮台下には、花瓶と香炉が前机上に描かれ、蓮台の左右に「月待供養」の文字が刻まれています。前机下には、紀年銘と思しき「文」という文字を中心に、その左右には偈(げ)「仏徳の賛嘆や教理をのべたもの)もしくは供養者名と考えられる文字が彫られていたことが痕跡からうかがえます。板碑の形態や現存する図像板碑から考察すると15世紀後半頃に制作されたと考えられることから、「文」は文正か文明、あるいは文龜という年号が想定され、本図像板碑が室町時代に制作されたと推定できます。また、阿弥陀一尊と月待供養が刻まれた図像板碑は関東地方に10数点しか確認されておりません。そうした意味からも、貴重な文化財なのです。

#### 【今後の展示予定】

##### 企画展「夏休み作品展」

平成19年8月16日(木)～9月9日(日)

\*体験学習講座で制作した作品を展示します。

##### 特別展「住いからみた近・現代の渋谷」

平成19年10月2日(火)～12月24日(日)

\*渋谷の明治以降の住宅の歴史を振り返ります。

##### 特別展「賀茂真淵(仮)」

平成20年1月22日(火)～3月23日(日)

\*賀茂真淵の生涯と彼の研究成果を紹介します。

#### 白根記念

#### 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※ 10人以上10名以上の団体料金

※ 60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.5

平成19年8月1日発行